
マオ ～許されない神～

秋野 功成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マオ ～許されない神～

【Nコード】

N1439B

【作者名】

秋野 功成

【あらすじ】

マオ・・・それは神の一人。一人の少年に乗り移ったマオは、その体を借りて、仲間であるはずの神と戦う……。それは許されなくても、戦ってしまうのであった……。

01 課題（前書き）

小六から中一まで（これを投稿したのは中三時）の時の作品を多少修正したもの。

その時は推敲や構成など知らなかったので、話は無茶苦茶かもしれません。頭にあるネタを、カチャカチャとワープロを使って書いていた時代でもあったので（汗

一通り目は通したつもりですが、多分誤字脱字が半端なく多いと思います。もし見つけた場合は指摘ヨロシクです。

01 課題

01

「うーん」

そんな唸り声は、ある一つの家の、一室より発していた
またその声は、もう一つの影にもしっかりと聞こえ、それを不審
に思ってたか、質問をかけた

「どうしたんだ？エル」

「うーん・・・って、え！？ゼロ、いつから居たのさ」

エルはかなり驚いている。いつから居たのかと言う感じだ

ゼロはあきれたような様子で、言った

「おいおい、お前が俺を呼んで、それで来たんじゃないかよ。それで
部屋に来たらお前が居たが、後ろ向いて何か考えていて、邪魔する
のは悪いと思ったが——」

ゼロは、エルの部屋にあつた時計をちらりと見て

「待ったあげく、お前は二十分は唸っている。何をそんなに考えて
るんだ？」

時計は四時四十分を指していた。ゼロが来たのは約四時二十分
である

「うーん、それが・・・」

エルは一息ついて

「『マオ』について知りたいんだ」

ゼロは軽くしかめっ面をして

「マオ？お前はそれに興味を持ったか」

「まあ・・・ね」

原因は近いが、興味の理由は「宿題」だ

エルの学校では、夏休み中に自由課題のレポートを出す事になっ
ているが、困った事に、夏休み末になっても何も思いつかなかった
のだ

苦渋の決断は「町の歴史」だった

歴史は大の苦手であったが、この際仕方ないと思って、いくらかまとめてみた

“ 廃墟となりうるこの町は所々で復興作業をしている

商売を頑張っている人、建築に性を入れている人、そして「ホームレス」と言って家すら持っていない人などが住んでいる

そのためか最近は街も色とりどりとなっている

しかしながら、いま、国は「戦争中」である

だが、戦争中と言っても生活はさほど苦しいわけでもなく、ただの不景気程度

この戦争は「マオの戦争がきっかけ」と言われている”

ここで、エルは一つの疑問に当たった

マオとは何か、と言うのが一番の疑問となった

このレポートは、わからないことが出来たら最後の最後まで書かなくてはならない

教師が単にそう言う性格なだけだが、かなり生徒にも影響が出る故に、このマオについての疑問を放っておくと、それなりの罰が下ってしまう

そんな勘弁だ

そのため、マオに詳しい幼馴染のゼロを呼び、聞こうとしたわけだ。

「教えられない」

「ええ!？」

なぜ？エルは思った。

なぜゼロは知っていて、僕は知ってはいけないのか

「何で教えてくれないんだよ。教えてくれないと先生から罰が下るんだよう」

エルは半分裏返ったような声で懇願こんがんした

それだけ、罰は恐ろしいのだ。

「駄目なんだ」

「なんでさ」

「言えない」

「なんで？」

「言わない」

「・・・」

「・・・」

「・・・言わない？」

「言わない」

無駄だった。

仕方がないので、ゼロが話題を変えた

「マオのことだけで悩んでいたのか？」

正直、エルがここでYESと答えれば、ゼロは即座に帰るつもりだったが

「うーん——いや、他にもあるよ」

それは否定された

「今考え付いたような言葉なのが気になるが・・・」

気になるのは、言い出すのにエルが迷ったからだ。

忘れてたとしてもあんな言い方は無いからである。

「気にしない気にしない」

エルはそれをなだめるように言う。結構な釣り合いだ。

実は、ゼロとエルは幼馴染であるわけだ。

隣の縁と言うか、彼らの家は隣同士で、親戚関係が昔から深い。

当然のようにエルとゼロは兄弟のように育ってきて、それなりの絆を結んできている。

「で、話を聞こうか」

「なるほど・・・」

ゼロはエルの話を聞いて、半分驚きを隠せないような顔になった。

要約するところという話だった。

エルはいくらか空想人である。そのため、いくらか妄想にふけるのだが、最近は変なのだ

現実ではありえない。考えたものが現実化するというものだった
剣や斧など、鉄製のものが主として。

「やはりマオか」

ゼロがボソツと呟いた。

その言葉を、エルは聞き逃さなかった。

「マオ？」

ゼロは、自分がいったことに気付いてないらしく

「え？ いや違うさ。そんなこと言ってねえよ」

「嘘だね」

「・・・言ってない」

「言った」

「・・・言って・・・ない・・・」

「言った」

「・・・」

「・・・」

数秒の沈黙の後、

「・・・はぁ・・・わかった、説明するよ。マオについて」

エルは軽くガッツポーズをしていた。

マオ

それは材料さえあればなんであろうと作り出せる

選ばれた者しか使えないと言われた能力

能力事態は認められている。が、それを有効に使えないものが多い
だが、逆に能力者を利用しようとする者がいる

それにより兵器が作られる――

「まさかっ!」

エルはその言葉説明を聞き、さっきの自分のレポートの内容を思い出した

——だが、戦争中と言っても生活はさほど苦しいわけでもなく、ただの不景気程度

「能力者の・・・利用・・・」

エルはその事に気付き、恐ろしくなった。

「そうだ、あえてお前には触れて欲しくなかったんだが・・・」

二人とも沈黙してしまった。

子供にとって、その非現実的な事は、誰にだって受け止められなかった。

利用されるなんて——

「だけど」

言葉を切り出したのはゼロだった

「お前を利用させようなんて、俺がさせない」

ゼロの言葉は、自身満々であったが——

「信用できないね」

「ええ！？」

エルがこう言うのには、わけがある

ゼロは、エルが困っている時に、いつも「まかせとけ」と言う。

しかし、その度に本人はボロボロになって帰ってくる。

つまり、エルにとっての、その言葉は「信用できない」と言うより「心配」しているのだ。

「俺を信じる。絶対に守ってやる！」

ゼロが必死になって説得する。こうなってしまうてはエルは引くしかない

「——冗談だよ。信用する」

「本当か！？」

「う、うん・・・」

とは言っているが、エルは本心で本当とは思っていない

単に、このままだとゼロの説得が続くだけなので、調子を合わせ

ただけだ

「じゃあ準備してくるわ!」

ゼロは片手を振って、エルの部屋を飛び出した

「・・・」

部屋に取り残されたエルは、しばらく黙って

「え?準備って?」

あまりにも遅い反応を示すのであった

02 マオ出現（前書き）

01は読んだでしょうか？

あまり分けた意味は無いでしょうけど、

「これは面白い」と思って続けてみてくれれば幸いです

02 マオ出現

「おまたせ！」

「うわっ!？」

別にそんなに速くしなくてもいいのに、といつくらい無駄に走ってエルの部屋に駆け込んできたゼロ

背中にリュックを背負っており、なにやらゴツゴツしてそうなものが出っ張ってる

「何・・・それ・・・？」

ゼロの案は時々とてつもないものと化す（五年前、猫退治のため、電線を張るといったゼロは、本気で近くの電線を引っ張ろうとしていた事があった）

故に聞くのが恐ろしかったため、おずおずとエルは聞いた

「これか？これは『マオ研究材料』だ。ほとんどがジャンク（機械ゴミ）パーツだがな」

どうやらゴツゴツしてそうな出っ張っている物は、電子レンジやらパソコンやら携帯電話の電化製品のようなだ

「研究材料？僕が!？」

「違う違う、研究したものだ。これでお前がマオを使えるかわかる」マオを使って何か作るのらされるか？とエルは思ったが

「さて、町外れのジャンク屋に行こう」

「・・・え？」

リュックの意味はほとんど無いらしい。ゼロは一度もリュックを下ろしてはいない

それともこれから使うのだろうか？

「ほら、行くぞ」

「え？ああ、うん」

——町外れのジャンク屋

そこは、あまり整理されていない様で、小屋を中心としたジャンクジャンクの小山が、数々と並んでいた

「ここが・・・」

「そうだ、ジャンク屋だ」

「で？どうするの？」

「もちろん、呼ぶ」

「・・・呼ぶ？」

すると、ゼロは思いつきり息を吸い込み

「ジジイ

——！！出て来いやあ——

——！！——」

どうやら小屋の中の住人に話し掛けているのだろう。

しかし、小屋まで十メートルと無いのに、そこまで声を大きくする必要は無いだろう。

そして、案の定

「やかましい！ジジイと呼ぶな、青小僧！ワシにはキールと言う名があるんじゃない！」

大声で返された。

しかし、キールは誰が見てもお爺さんといえるような感じだった
白髪に白髭、身体はいくらか華奢である

顔は見えないが、多分しわしわなのだろうとエルは考える

「うつせえジジイ、それよりジジイが求めている『関係者』をつれてきたぞ！」

この場合の関係者はマオ関係者の事である

「だからジジイと・・・む・・・なるほど、君がマオの——」

キール爺はエルの顔を覗き込むように見た

エルは微妙に引いた。

「ジジイ、要求は済ませたぞ。さっさとアレを直せ」

「まあ、早まるな。本物かどうかを確かめさせてもらう」

エルは話がわからず、そして成すがままに、キールに腕を引かれ、

ジャンクの山の前に立たされた

「じゃあ、能力を見せてもらおうか」

「能力って・・・まだ自分が使えるかもわからないんですよ？」

「知らずの内に使い方はわかっていくはずだ・・・さあ！」

エルは気付いた。

そうだ。僕はいつも「モノ」を考えればそれを作れた

じゃあ、そうするべきなのだろう。と

「わかりました・・・」

エルはそう言っ、目をつむった

一方でゼロは考えていた

これで良いのだろうか？

本人すら望まないマオの利用をさせて・・・

しかし、キールはやる気マンマンだ

それはそのはず。もし本当にエルが能力者なら、キールは大儲けなのである

キール自信はジャンク屋である。つまり良いパーツと言うのは売れるものなのだ

だから、エルを使って良いパーツを作り、金儲けを企んでいるわけだ

「・・・」

・・・ん？

エルに妙な気が表れる

ゼロは悪い予感を感じた

「・・・うっ！」

「おい、どうした！？」

ゼロはエルに駆け寄っていく、エルは立ったまま失神している様だ

「おい、大丈夫か」

心配すると、エルは目をあけた。

どうやら無事・・・ではなかった

エルから違う声が出たのだ

「・・・フウ、最近力を使わないから鈍ったゼエ・・・」

口調と言い、声と言い、打って変わったような性格となったのだ

二重人格かとゼロは考えた

「お、おまえは・・・誰だ」

「ん？・・・きみは・・・えーっと・・・ゼロだね。一体なんだい？」

「『一体なんだい』じゃねえ！本物のエルはどうした！」

ゼロは拳を作り、殴りかかる。どうやら既にエルとは考えてないようだ

しかし、殴りかかる途端エル（？）があわてて制するように両手を手に出した

「ま、待て。話をさせてくれ」

「話が出るほど落ちついてねえんだ！本物のエルはどうした！？」

「落ちつけ、落ちつけ。エル君は無事だ」

「本当だな！？」

しかし、ゼロの周りには疑いの気配がめぐっている

それを悟ってか、エル（？）は出した手を振り、こう言った

「信じないなら、まずひとこと言わせてくれ。話すかはそれからで、そして一息つき・・・」

「俺は『マオ』だ」

ゼロは信じられないながらもマオの話を聞く事にした

「マオに乗り移られたものは二重人格となる」・・・終

「・・・って、待てッ！それだけじゃ納得しねえ！」

合計二言だ

「えゝ、めんどくせえよ・・・」

「いいから！」

「エルは無事なんだぜ、別に・・・」

ゼロは再度右拳を固めた。基本的にゼロは暴力反対なのだが、男共が女子についてどうたら言っただけで来るので、片っ端から殴り倒して、それなりに強くなったりもしていた

だがその強さが女子の好意の分に反映してる事を、ゼロは知らない
「わわわ、わかった！なんで俺がエルの体にいるのか説明する、殴らないで！」

かなりおどした様子で言う。どうにも殴られるのは嫌らしい
マオは軽く落ち着いてから語り始めた

俺がこの体に移ったのは偶然だ
まあ、誰でも良かったんだがな。しかしコイツ（エル）にはちょっと長けた所があった

——想像力だ

想像力がある奴は具現化が得意な俺にとって打って付けだから乗り移ったんだ

「ん？まてよお・・・なんで乗り移ったんだ」

「だから想像力だよ・・・」

「違う違う、どうして乗り移るような状況になったかってことだ」

「知らん」

「殴——」

「待てー！！ほ、本当に知らないんだ、信じてくれえ！」

「むう・・・信じてやろう——」

しかし、ゼロはふむうといった感じに腕くみをする

「ん？あれはなんだ？」

マオはそんなゼロの様子などお構い無しに、ジャンクの山を指差す

「んあ・・・考え中・・・?!」

ゼロは驚いた。人が倒れているのだ

「誰だろ？」

マオがのんきに言う

「言ってる場合じゃないだろ?! 助けな——」

しかし、ゼロははっとした

も、もしかああの人物は——

「なんだ、ジジイか」

とっておきの言葉^{イヤミ}をマオに横取りされた

——そしてゼロ自身、その日意外にエルを殴った事はない

03 間

03

「アイタタタタ！」

悲鳴を、エルがゼロの自宅であげていた

と言うのも、怪我の治療で薬が染みることによる悲鳴であるが

「わ、悪い」

ゼロがあたふためいて謝る。ゼロにとって、こういう治療などは不器用極まりないなのである

「やっぱり自分でやるよ。前からゼロの不器用さは知ってるしね・

・」

エルが軽くため息をつきながらも、ゼロから奪い取るように治療道具を取った

右頬に切り傷

あの時、殴ったとまでは行かなかった。マオがとっさによけた事と、それに生じてゼロの手が掠った事によって、右頬が切れただけで済んだ

と言つても、「右頬が切れただけで済んだ」と言うのは、逆に言えばこれ以上のことをゼロは出来るのであり、中学生ながらも、やるうと思えば大人を一瞬にしてノックアウトできるんじゃないかと言つ勢いなのだろう

だが、この事で、エルに不思議な事を聞かれた

「そつえば、何で僕にこんな傷があるの？」

「へ？」

ゼロは当然のごとくまぬけな声を出した。

エルはあのときの事を覚えてないのか！？

「覚えてない—————というか何？」

「マオのことだよ、お前と性格を変え・・・」

ゼロは口に出さなかった

全てはエルを思ってた

いずれ気付くとしても、今は言わない方がいい。知ったら知ったでエルに負担がかかるだけだと思ったからだ

だが、その「言わない」という考えも虚しかった

「言ってくれないの？」

「い、言わん！」

ゼロには弱点があつた

「じゃあゼロ、この傷はゼロが殴ったものだよね。しかもかすつたと言ふ事で」

「・・・いや・・・違う・・・」

認めたら認めたで、何かと言われるので、どうせエルが知らないのなら、という考えで言わないつもりだ

「嘘だね」

「！？・・・またか」

「そうだね」

ゼロの弱点、それは口がやわらかい事である

口は本当に結ぶくらいの使命感も持ち合わせているのだが、とにかく口げんかで追い詰められるのが苦手

と言ふよりも、今まで口で喧嘩する奴は片っ端から拳で黙らせてきたので、弱点は皆に知られていない

だが、エルとなると別だ。絶対に拳は向けないと考えていた。それ故、追い詰められるとあっさりと口を割る

強いて言えば、ゼロの宿敵はエルなのである

「で、なんでこんな傷が？」

「・・・それは言えない」

「言ってくれないの？」

「そうだ」

「傷の事——小母^{おは}さんに言つよ？」

「！？」

ゼロの第二の弱点、親

故にヤバイ

「・・・言うよ」

ゼロは話した、マオのことや覚醒の事
他にも色々と

「うん、で・・・ええええええ！」

そして、キールがどうなったかも

「マジ？」

「そうだ、キールは埋めた」

ジャンクパーツを布団として。

04 予兆

04

うーん・・・

ゼロはその夜眠れなかった

なぜだ？俺が何か悪い事したか？

そんな風にも感じていた

「まあいい、温めた牛乳でも飲むか」

布団をどかし、そう独り言のようにつぶやいた後、ゼロは自分の部屋から出、一階に降り、冷蔵庫から牛乳を出した

面倒くさい場合は電子レンジで温めるのだが、ゼロはそれが好きではない

よって鍋に牛乳を入れ、温める方法にした

カチッ

・・・あれ？

カチッ、カチッ

——点かない

「どうなってるんだ？」

親が起きないように、ガスコンロを調べてみた

普通に考えれば着火ミスという事もありえるのだが、ゼロの家ではそれがあつた事が無いので、確認するしかなかった

ゼロは機械には詳しい。もちろんガスコンロにも詳しいことは詳しいのだが、常識は知らないのである

「はて？」

もちろん調べても何も異常は無い。ただ、ネジが欲しいようだ。

しかし一つだけ外れているだけなので支障は無い

どうあっても原因がわからないゼロは、思い切って再度火をつけてみた

点いた

「お、点いた」

あれ？

点いた事は点いたのだが、何か足りないような……

「……ああ」

牛乳を忘れていた。俺はなんというトンチンカンだろう。そうぜ

口は思ったが……

ん？

さっき牛乳入れたような気が——あれ？鍋が——

なにいいい！！？？

なんと鍋のそこに穴があいていた。先ほどまではあいていなかったはず。これから牛乳が漏れた……ん？

気付けば、いつの間にかゼロの手にネジがあった

ネジ？俺は取っていない、考えただけだ

——考えただけ？……まさか！

ゼロは驚くべきものに気付いたので、牛乳は諦めて寝ることにした。明日キール爺のところに行かなくては！そう思った

ゼロは急いで寢床についた。恐ろしい事に、すぐ寝られた

これ……力か？

そして、それはきっかけに過ぎないことを、（何故か作者も）知らない

04 予兆（後書き）

何が始まるか・・・それはこの先お楽しみください

05 ゼロのマオ（前書き）

物語で言つと本編に当たりますね

05 ゼロのマオ

05

「エル！」

ゼロが疾風のごとく、エルの自室へ駆け込んできた

「な、何!？」

エルは驚く。何せチャイムは聞こえなかったのだから。否、鳴らさなかったのだ

ゼロは猛スピードで、エル家のドアに激突。少し経って両親が不審に思い、ドアを開けたところ「お邪魔します」と言い、猛スピードで駆け上ってきたのだ。

「早すぎだよ！さっきのドアにぶつかった音はゼロなの！？」

「んなこたあどうでもいい！俺も手に入れたんだ！」

「何を？」

今回は、それに皆目見当も付かないエル
だがゼロは

「ちがうっ！マオだ、マオを手に入れたんだ！」

┐
•
•
•
•
^
?
└

マオ、
といえは・
・
・

「ええええええええええ！？ウソオ！？」

エルは信じられなかった。自分の次はゼロだとは

偶然にしても出来すぎではないかと思ひ、嘘だと考えたが

「嘘じゃない、ならば今から……」

「スト——ッ！ここでやらないで！本当かどうかは実験場（キールのジャンク屋）でやろうよ！」

ちなみに、ジャンク屋がすでに「実験場」となっている事を、キル本人は知らない

「うん」

「なに？不服？」

「いや、別にい」

実際不服だったりした。

——というわけで・・・

「おい、ジジイ！」

「ジジイというなと言うとろうが！何度覚えりや・・・おお、エル君。久しいね」

キールは昨日と同じパターンで家から出てきた

しかし、昨日の件（マオの発動瞬間の衝撃波でジャンクの方吹っ飛ばされた事）もあつたせいか、頭には包帯、手には杖の代わりの三脚を持っている

重傷人のはずだが、やけにピンピンしている

「昨日会つたばかりなんですけど・・・」

エルが言うのも気に止めず、積極的に話し掛けてくる

絶対にマオを使って、金儲けを企んでいる

しかし、今回はエルだけじゃないって事もあるということだ。と

ゼロは自身気に考えていた

「ジジイ、俺もマオの持ち主だぜ」

「・・・？」

信じてはいない。と言うよりも、ゼロが話した事など聞こえないふりをした

しかし、ゼロはめげず、エルにも聞こえるくらいにはつきりと言った

「だ・か・ら！俺もマオの持ち——」

「わかつたわかつた。つまらんジョークは無視として、エル君、こんな相談なんだがね・・・」

相手にされず、杖の代わりの三脚で突付かれた

なぜ？エルの場合は簡単に信じたのに・・・

ゼロにはわからなかった。何故相手にされないのか。

思い切ってゼロは問い詰めてみた。

「なぜ信じてくれない」

「嘘ばかり並べてる貴様には、信用の余地が無い」

「・・・ああ」

なるほど、と思った

ならば信用させれば良い

力を使えば良い

「見てろよ・・・」

ポツリと独り言のようにそうつぶやいた後、ゼロはキールと逆の方のジャンクの方を向き、目をつむった

「むう・・・」

必死に想像力を膨らませる。しかし、これと言ったものが浮かび上がらない

何故なら、ゼロはそういうのが苦手な方だからだった

「むむむむむむ・・・」

全く思いつかん、もはや瞑想にも満たない

しかし、そこでふと思いついた

ゲームの武器でも思い浮かべればいいんだ

ゼロは昨日やったアクションゲームの武器を詳しく思い出した

それはそれは簡素なもので、一言で言えば「日本刀」だった

だが、簡素でも効果はあった。キールたちは気付いたのだ

「ん？」

キールが背後に不思議な気配を感じたので、振り向くと

「まさか——マオか」

キールは半分驚いた様子で、頭の包帯を取りながら目を輝かしていた

ゼロの前にはジャンクパーツが集まり、刀の形を成していった

「やっぱ——本当だったんだ」

エルすらも驚いた。その刀はあまりにも正確だったからだ

となると、ゼロもエルの時と同様に、マオが・・・そんな不安が

エルによぎった

だが、そのエルの不安は、それ以上の恐怖によって打ち消された

「おお——これなら儲かる」

ヤバイ！

この怪しい爺さんにゼロまでも利用されては敵わない！

しかし徐々に実体化していくゼロの刀。完成したら利用される
とにかく危険だ。

「ゼロ！やめるんだあ！」

ゼロの背中に大声で呼びかける

「・・・」

だが、返答は無い。しかし少しして答えが出た

「・・・なぜだ？」

「は？」

その声はあまりに小さく、後ろを向いていたため、エルの耳に完全には届かなかった

しかし、声は届いているとわかったので、再度声をかけた。もちろんキールにはわかり辛いように。

「そんなことゼロまで出来ちゃうと、利用されるのがオチなんだよ
お！」

いまいちシリアス感が無い言い方だが、案の定キールにはわからなかったようだ。

しかし、ゼロにも返事はない。

——そして、刀は完成した

06 ゼオの登場

06

刀は完成した

そして、それがきつかけかキールの眼はまるで餌を目の前にしたライオンのようだ。

その瞬時、片手を前に出し、餌を狙った獣の目はそれに向かって猛スピードで走り出した

が、その速さは無駄だった

「何するつもり？」

キールが刀に手を伸ばし、手が届くその刹那、刀の先はキールの鼻先を向いていた

あまりに早すぎる展開だったので、エルにすら何が起こったかはわからなかった

だが、その答えは一つだった

「ウソ……」

ゼロがキールに向かって刀を向けているのだった

「なんで……？」

エルは解らなかった。ゼロがキールに向かって刀を向けているなど……

その状況を理解できていたのは、ゼロだけだった

そして、ゼロは先ほどの質問を続ける

「何するつもりかと聞いているんだけど？」

口調と声はもはやゼロのものではない。どうやらエルの時と同様、マオと性格が入れ替わったらしい

しかし、問いに答えないキール。それにゼロ（マオ）は苛立ちを見せ始めるが、キール本人は、どうやら状況を把握できていないようだ

すると気を利かしてか、苛立ちが出たのか、マオであるゼロは説

明してやった

「知ってるかい？あんたの目の前には刀の矛先が向けられている。答えないようなら刺すから」

約三秒、沈黙が流れた後、キールは全てを把握した
そして刀の刃を見て、一瞬にして顔の血の気が引き、後ろにとび
ずさった

「あ、わわわわわ・・・」

キールは数秒その状態が続き、そして気を失った

「ちっ、反応悪いジジイだ」

馬鹿にしたような台詞を吐いたあと、ゼロ（マオ）の眼はエルを
捕らえる

その瞬間、エルは固まった。そいつの目はゼロそのものではあつ
たが、明らかに目の奥が違う

まるで、それは・・・

「戦いに飢えているな・・・てめえ、マオ一族じゃねえな」

いつの間にかエルの口からそんな言葉が漏れる

いや、それはエルの言葉ではない。マオの言葉だった

「悪いがエル。少しばかり体を借りる」

エルはいつの間にもすりかわったのか解らなかったが、この場合の
事を考えて、エルは了解した

「君もマオか」

ゼロの方のマオが言う

構えるのかと思いきや、逆に刀の矛先を地面の方を向け、構えて
いると言うよりも、楽にしているとと言う体制だった

「君”も”と言われる筋合いはねえ。俺はマオだ。てめえこそ何者
だ」

わずかながらエル側のマオの言葉に力がこもる。

しかし、ゼロ側のマオ（？）はそんなことを無視し、両手を広げ
て、高らかに言った

「ハハハ、バレていたねえ。僕は”ゼロ”真の神である絶対神のし

もべさ」

ゼロに乗り移っているマオらしき者、ゼオはそう語った

「ゼオ・・・だと？まさか、戦いの神か——それなら戦いに飢えた眼をしても・・・」

「黙ってもらおう」

瞬間移動でもしたか、間合いが一瞬にしてに詰まり、刀を振り上げればエルの胸に刺さるような距離になった

「い、いつの間に・・・」

マオは固まってしまった。逃げようと思えば逃げられるのだが、それが出来ないわけがあった。それは、

——瞬間移動

マオは驚きを隠せない。どの神であっても瞬間移動能力は無いのだから

しかし、それを察してか、ゼオはこんな事を言い出した

「瞬間移動・・・出来ないと思っていた？残念だけど出来るんだよ。マオ君」

薄ら笑いを浮かべるゼオ。それと対照的に、マオは冷や汗を流すしかし、マオが知る限り、瞬間移動は無理だ

「——そんなはずはねえ。俺ら神一族は瞬間的な行動は出来ない。あくまで人間の考えだ。だが、時の神、クロクアを除けばだな。時を止めて動くだけだ。まさかお前はそれが出来るとでも？」

これは技能を必要としないため。と言うより、神自体肉体が無いので、自ら動く事は無いのだ

そのため、瞬間移動という技は無い

「ククク、長つたらしい説明アリガト。でもな、出来るんだよ」
「何？」

「間違つても、もう嘘だとは言えないハズ。じやなきやこの説明、どうやってできるのかなあ？」

そういつてゼオはマオの胸に剣を向ける。後数ミリで刺さる短さだ
「てめえ・・・この体を殺す気か」

「勘違いしないでもらいたいなア。君もその体も殺すには勿体ない。ま、そもそも君は死なないだろうけど」

「もつたいない・・・だと？」

「そ、利用価値は十分にある。まだ生きてもらわなくちゃ。そのためにこんな身体借りたんだよ」

そういつてゼオはマオに向けていた刀を下ろした

「——ちっ・・・」

マオはエルの体で拳を握る、利用はもつともの屈辱だったからだしかし、火に油を注ぐように、ゼオは言ってくる

「屈辱かなア？でもこの状況、乗り切れないっしょ？」

マオは、キレた

「馬鹿にするなあ！」

そう言つてマオはステップで一步後ろに下がり、右手を広げたその瞬間、すでに銃が出来上がっていた

マオは出来上がった銃を両手で持ち直し、ゼオに向ける。その間わずか一秒

しかし、その一秒は遅かった

両手で持ち直す前に、銃はゼオの剣により銃口が切られていたいくら一歩しか動いてないとはいえ、これは早すぎる

やはり・・・

「そつ、君が信じない瞬間移動ダヨ」

ゼオが薄ら笑いを浮かべる。しかし今回は笑っていない。悪魔の微笑だ

しかもゼロ自体顔かたちは整っているため、余計に悪魔の微笑に近かった

「ちい！」

マオはもう一度ステップで下がった

そして切られた銃を捨て、左手に同タイプの銃を作り出してゼオに向けた
しかし

「がふっ！」

銃を向けるその瞬間、腹に峰打ちを食らった

それは刃の方ではないにせよ、鉄で腹を殴られたので、これはかなり痛い

「ぐぐぐ・・・」

腹を抱えてうずくまるマオ。それ相応の痛みが心の中にいるエルにも来る

「だから無駄だと言って・・・あ、言ってないか。でも無駄だってわかったでしょ？この瞬間移動の術で」 峰打ちを食らわせた剣を鞘にしまいながら言うてくる

「だ、だがなぜ・・・その技を・・・」

瞬間移動——やはり時を操れなくては出来ないものだった

だが、奴は操れない——力を得なければ

「わざわざ教えると思う？でもいいや、減るもんじゃないしねえ」

うずくまるマオを見下ろし、自慢話をするように言った

「時の神クロクアを喰ったんだよ」

マオは驚いた。そんなはずはないからだ

「喰った・・・だと！？まさか貴様・・・」

「そ、おきて破りだヨ？だからなーに？」

「おきてを破る事は死——つまりこの世から消滅させられる。てめえは死ぬんだぞ」

そう、仲間を食うことは元より、神にもやってはいけない事もあるこれを破った場合、即座に殺される。今すぐでもおかしくないのだが——

「でもねえー、刑を執行する人がいないと思うなー？」
「何？」

その言葉をマオは理解できなかった

「理解できない？」
軽く言うてくる

それは、まるで友達に対して問題が解けない？というてるような

感じだった

「……」

マオは答えを考えながらも、腹の痛みが治まってきたことを確認するなり、反撃も考えていた

しかし、スキがない。どうあっても反撃を受けるし、下手すればエルの体を殺すことになる

「刑を執行する人がいない。どういう意味かわかるかな？」

「……」

「ねえねえ、解ってるんでしょ？」

「……」

確かに答えは見つかっていた、だが

「殺すよ？」

「！？」

さすがに苛立ちが出たらしい。殺すとまで来た

答えるしかないのか……

「仲間を……殺したのか」

「ピンポーン！正っ解！」

ゼオは拍手しようとしたが、刀を手に持っているため手が空いてなく、刀を左脇にはさんでから拍手した

マオはその事を見逃さなかった

「食らえ！」

今度は銃ではなく刀を精製して、狙った

——刀を

「ぐっ」

衝撃は強く、刀が折れはしなかったが、その反動でゼオは左脇の刀を落とした。

さすがに刀を狙うとは思わなかったのだろう。勢いで後ろに数歩下がってしまったゼオ

マオはゼオの落とした刀を奪い、能力でネジ数本に変えた

「——なかなかなるなあ、マオ。でも君は勝っていない。僕を殺し

てないからね」

一旦隙を見せてしまったとはいえ、余裕のゼオ。そう、殺されなきゃ良いと思ってるからだ

「・・・」

「ハハハハ！でも絶対勝てない。君はこの体を殺せない——だろ？」
たしかに、マオはエルの身体を借りていて、ゼオもゼロの身体を使っているのだ

無駄に手出しは出来ない・・・が

「・・・わかつているじゃないか」

不思議な言葉をマオは言った

それを、ゼオは理解できなかった

「えーっと——フフ、まあね。じゃあ、今日はここらへんでおさらばするよ」

ゼオ自身、特に言葉を詮索する意思はないようだ

そして、瞬間移動を使って消えようとした、しかし

パン

「?・・・ぐっ」

ゼオ——いや、ゼロの足に穴があく

明らかに銃のあとだ

「・・・てめえ・・・撃ちやがったな・・・」

微妙に口調が変わるゼオ、だがそれでも何故かゼオには見えない

「悪いな、ゼロ」

マオは銃から出た煙をガンマンのように吹き消し、ポケットにしまった

「・・・けっ、あとで殴ってやるよ・・・」

ゼオには見えない理由、それはゼロが意識を取り戻したからである
故にゼオは心の内に閉じ込められているので動けない状態である

「・・・どうすれば、この疫病神を払えるんだ・・・？」

かなり足が痛いのか、ゼロの声が小さい

「念じる以外方法はないな。強く念じる。こんな力はいらないと」

「難しいな・・・」

そして、念じ始めた

こんな能力は要らない、こんな能力は要らない・・・
ずつと、エルと仲間で居たかった
そのために、趣味も合わせたり、エルを守ったりした
だから、この「力」も欲しかった
けれど、こんな・・・こんな・・・
こんなジジイに利用されそうな力なんかいるもんか！

光った

ゼロの体から光り輝くものが出た

それは――

「うう、念が強すぎだ・・・」

光り輝くものが口もないのに口を利いた
光り輝くもの・・・それはゼオだった

「ざまあみる」

ゼロはへらへらとゼオに向かって笑った。しかし足が痛むのだろ
う、へらへらしていた顔もすぐに苦痛の顔になる

「人間の分際で」

ゼオに舌があれば「チッ」と舌打ちしそうな言い方だった
「僕は天上に帰るよ、マオ。君と戦えたのは楽し・・・ぎゃ！」

マオは手に持っていた刀を使って、光り輝くゼオを真っ二つにした
そして、言った

「人を殺すことは用意ではないが、仲間を殺すことはできる。そう
だろ？ゼオ」

「~~~~~」

言葉にしようとしているのだろうが、言葉になってない

「じゃあな、消えてくれ。ゼオ」

そう言って、マオは光り輝くゼオを、一瞬で細切れにした

その魂は輝きとなり、砂のように散った

07 戦いの後

07

「あぐあ——！！！」

「だ、大丈夫？」

病院の一室。病院の構造自体は寂れているが、色の配色が良いせいで雰囲気は良い

悲鳴の元は、ゼロの足がギプスから抜けて落ちたのだ。

男が廃^{すた}るくらいの大きな悲鳴だ。

「だ・・・大丈夫・・・じゃない・・・」

ゼロの状態がやばいので、看護婦を呼んだ。だが、コールを押す前に廊下で医師らしき人を見つけたので、すぐに手当てしてもらえた。それでもゼロは気を失っていた

「はあ・・・」

エルは疲れていた。今の件もあるが、何しろマオに体貸して、その上あんな動きをしたのだ、そりや疲れる。

このまま寝てしまおうかな。とか思ったが、それは出来なかった
「寝るな！」

「え！？何？何？」

頭に響くような声、といってもキンキンする声ではない
そして聞きなれた声・・・

「ああ、マオか」

「悪いか？寝てもらってはちょいとまずいだろ？仮にも施設なんだから、それで寝るのは駄目だ」

「施設・・・ねえ・・・」

確かに施設と言えよう。だが、この寂れた町での寂れた病院は、実は施設でもなんでもない。

建築物だ

そんなの、マオ使えば一発で出来る・・・そんなことをエルはぼ

やけた頭で考えていた

「駄目だ」

「・・・・・・え？」

寝ぼけているため、言葉の意味を理解するのに時間がかかった。でも思い出した、確かマオは心の内も見れるんだ・・・・と

でも、駄目って・・・・何？

「・・・・・・」

「駄目って何だよ。心読んでんでしょ？答えな——え!？」

なんと頭の中から寝息が聞こえる。ゼロのものではない——となると・・・・

「寝るなー!」

エルは、頭の中で安らかに寝息をたてているマオに向かって叫んだ。

08 平和、そして予兆（前書き）

よくよく考えれば、今までののはプロローグだったのか？と疑うくらい、第二の本編です

08 平和、そして予兆

08

数カ月後

ゼロの足は恐ろしい程に早めに完治し、現在エルとともに学校に通っている

それでもマオは居座っているが

「ねえ、マオ。この問題教えて」

心の中には心の声で話せないの、いつでも話すときは実際の声となる

だから、時折それは怪しいくらいの独り言になるし、数ヶ月前の病院のときはかなりの大声だった為、注意された

だから今は授業中だけに小声となっている

しかもテストの答えを聞こうとする魂胆だ。しかし、マオは答えなかった

「ねえ、マオ、答えてよ」

懇願するように言うエル。小声ではあるが、心をこめているつもりである

「駄目だ、こういう場合教えちまうのはカンニングだと言うし、実際の知能はお前と同じしか持っていない」

「・・・え？神なのに知能無いの？」

「い、いや違う。人をばか者のように言うんじゃない」

「じゃあ何故？」

「元々分離した際に、必要な知能意外は切捨てられるんだ。取り付いた人間の情報だけをコピーする為のな」

例として、神についての知能は残っているが、乗り移る状況になったことは知らない

知る必要が無いからだ

「へえ、じゃあ結局無知なんだ」

エルはテストのイライラもあつてか、皮肉たつぷりに言う

「なっ！うるせえ！このやろう！」

「ふっ、馬鹿が」

しかし、エルは失態した。今の言葉が皆に聞こえるほど大きく、今はテスト中であること

案の定、エルは先生に怒られた

「コラ！今はテスト中！それと人を馬鹿にするような事は言っんじやない！！」

「ふ、ひゃい！」

あまりに唐突な声に、舌が回らなかったエルだった

テストといえど、学期末とか本格的ではないために、皆からどつと笑いの声があがった。

その日はエルにとって最悪だった事だろう

数カ月後

ゼロの足は恐ろしい程に早めに完治し、現在エルとともに学校に通っている

それでもマオは居座っているが

「ねえ、マオ。この問題教えて」

心の中には心の声で話せないの、いつでも話すときは実際の声となる

だから、時折それは怪しいくらいの独り言になるし、数ヶ月前の病院のときはかなりの大声だった為、注意された

だから今は授業中だけに小声となっている

しかもテストの答えを聞くとする魂胆だ。しかし、マオは答えなかった

「ねえ、マオ、答えてよあ」

懇願するように言うエル。小声ではあるが、心をこめているつもりである

「駄目だ、こういう場合教えちまうのはカンニングだと言うし、実

際の知能はお前と同じしか持っていない」

「・・・え？神なのに知能無いの？」

「い、いや違う。人をばか者のように言うんじゃねえ」

「じゃあ何故？」

「元々分離した際に、必要な知能意外は切捨てられるんだ。取り付いた人間の情報だけをコピーする為のな」

例として、神についての知能は残っているが、乗り移る状況になったことは知らない

知る必要が無いからだ

「へえ、じゃあ結局無知なんだ」

エルはテストのイライラもあってか、皮肉たつぷりに言う

「なっ！うるせえ！このやろう！」

「ふっ、馬鹿が」

しかし、エルは失態した。今の言葉が皆に聞こえるほど大きく、今はテスト中であること

案の定、エルは先生に怒られた

「コラ！今はテスト中！それと人を馬鹿にするような事は言うんじゃない！！」

「ふ、ひゃい！」

あまりに唐突な声に、舌が回らなかったエルだった

テストといえど、学期末とか本格的ではないために、皆からどつと笑いの声があがった。

その日はエルにとって最悪だった事だろう

一方でゼロはこの日休んでいた

学校はエルと同じだが、キールの死により、葬式に出席と言う事になった

——はずだったのだが・・・

「やってらんねえよ、あのクソジジイ」

出席を拒否し、しかもテストを受けるのが嫌で、葬式を口実にし

て遊んでいたのだ

といっても行く当て無しなので、ブランコとベンチだけがある公園でぶらぶらしていたゼロだった

「はー」

季節は既に冬。手袋を忘れた為、手につけたその息は既に白かった寒さは既に実感してたが、今年はまだ十一月ごろだと言いつのに、今日は真冬の寒さを記録していた

ひざまである分厚いコートに（女子からもらった）マフラー。全体的にベージュで統一したおしゃれである

しかし顔は無防備なので、寒さのせいで顔が赤くなってきたまさに雪が降ってもおかしくないくらいの寒さである

「ふぁー」

さっきかけた息より多くかける、それでも手にかかるまでに冷えてしまいそうなくらいだった

「もう冬か」

そついう独り言は一言一言発するたびに白い息となる

巡回しているおまわりさんもない。寒さのせいだ、ひ弱なもんだし、これも好都合と言うもの逆に見つかっても困るのだ。寒さはしのげるが、メツタメタに怒られるのがオチだ

「ふう」

公園のベンチに腰掛けると、ゼロは目の前に、キールものであるジャンク小山が見えた

「そついえばこの公園、ジジイの家に近かったんだつけ・・・」

ふと思いついたように言つゼロ。言葉を聞く人はいないのだが。

「——そついえば・・・」

また何かを思い出したゼロ。左手を右手にかける

右手首に左手をかけ、二回転ほど回す。カチツと言う音がすると、右手首が外れた

ゼロの右手は、機械だった。それも肩まで

「・・・つめてえな」

手にはヒーター機能もあつた。人の体温を作り出す為だ。が、今回は故障していた

「あのジジイ、ちゃんと直しとけつたのに・・・まあいい、今度——あ・・・」

右手の誰にも直し方はわからない。設計図さえない

それは、右手はキールが作り出したものだったからだ

「くっそ！」

何故機械なのか、それは思い出さない事となっている

ゼロ自信、時折自身の手が機械だということを忘れる。それなりのトラウマがあつたからだ

今の現実に対して気分が悪くなったので、家に帰ろうとしたが、それが敵わない事も思い出す

「しまったぁ・・・」

寒さですぐに頭が冷えたゼロ。だが行く当ても無いとするとどうするかと・・・

そうだ、キールの家に邪魔するか

そう考えた。一応あれでも家なんだし、暖房くらいつくはずだ

——そして

「・・・ねえじゃねえか」

全く無かった。暖房どころか家の中には工具一式すらなかった

「なんでだ？なんで・・・」

はたと思い立った。必要なものはみんな業者らしいのが引き取ったのだらう。そう無理矢理納得したゼロだった

「・・・残念」

イスにでも座ろうと思ったが、それも無い事を実感。もはや家以外何も無いのだ

壁に寄り添うように座るゼロ。だが、隙間風が入ってくるので移動した

くしゃ

「ん？」

何か紙みたいのに当たったような音だった。何も無いはずなのに
と思い、しかしチラシだろうとでも思いながら壁にあった紙を取った
封筒だった

「・・・」

“親展 ゼロ”

「・・・俺宛？」

これは珍しい事だ。女子以外に手紙をもらった事はめったに無い
でも、親展とは・・・？

そう思い、封筒の中から紙を出す

「・・・！？」

ゼロは驚いた

設計図・・・それも、俺の右手のつくりだけじゃない
兵器だ・・・これ・・・

「あんの、クソジジめ！こんなもの書きやがって！」

作れとでも言うのか！そう思っ封筒ごと叩きつけようとした
だが――

「ん？」

設計図の裏に、何か小さく文字が書いてあった

“ゼロ、この文字を見つけれらるとは貴様も目が良いな
わしも目が良い。だからこの大きさを書かしてもらっぞ”

「・・・別に小さく書かなくていいじゃん・・・あんの、ジジイ」

“まだワシ・・・いや、俺のことをジジイと呼んでるか？

残念だな

俺はまだ二十五だ。残念だったな、ゼロ”

・・・

・・・

・・・な

「なにいいいい！！！！！！？？？？」

明らかに喧嘩を売られているが、買う人もいなければ嘘でもない
らしい

「う、嘘・・・ではないようだな」

“信じられないか？まあ無理矢理でも信じる。

実は髭をそるとイケメンが出てくるんだなあ、これが”

「馬鹿か」

“さて、本題だが、この設計図。俺は作らない

お前が作っても構わねえ。もともと、兵器はつくらんだろうがなあ

だが、兵器の意味、それはこの戦争だ。

ニユースで流れているのが全てではない。小規模な戦争が各地で起こっている。ありや嘘だ

今やこの星を滅ぼすくらいの力で戦っている。俺らと同じ人間どもがな！

それを止める為に、やってもらいたい

兵器の正しい使い方だな。この兵器はお前の右腕のオプションパーツだ。エルにでも作らせて使ってみる。”

「エルに作らせる・・・だと？」

駄目だ、それは絶対に出来ない。そう言い聞かせた
なぜなら、右腕は絶対にエルには話さないと誓ったから・・・

ゼロはエルにばれない為にと右手を作ってもらった

実はゼロは五年程前、自動車にはねられた

その時右手が轢かれ、右手の骨はグダグダ、再生不可能。

だが、義手を使うわけにはいかなかった。友を思うがためだった

「駄目だ！エルに迷惑はかけられない！」そういつて病院を抜け出した

その知らせはエルの両親にも届いた。しかし、ゼロの言葉があり、エルの両親はあえてエルに言わなかった

エルには「抜け出した」とだけ伝えただけだった

数日後、ゼロはエルたちのところに戻ってきた。

右手を付けて

今の・・・機械をつけて

親は詮索しなかった。エルの親たちも

しかし、本人からバラした。「キールに作らせた、でもエルには
言わないでくれ」

その意思が届いてか、今でもバレずにいる

「それを・・・エルに話せというのか・・・」

確かに自分で作る事は容易ではない

ましてやこれだけの設計図だ。キール自身でも一個作るのに一ヶ月はかかる

「やっぱり・・・でもなあ・・・」

ゼロは迷っていた。作るのなら戦争に参加する事になるから
すると、ゼロの座っていたところからもまた隙間風が吹いてきた
「さぶっ」

もはや家の構造が気になるゼロ。さっきまでは風は入ってこなかったからだ

仕方が無いので、ゼロはドアのほうへ移動した。現在確認できるので隙間風が入らないのはドアだけだ

そっちの方へ移動すると、寄りかかって座った

「ふう・・・ってうわあああ！」

なにせドア。寄りかかって開いてしまうのは当然だった

「痛ッ・・・ん？」

天地がひっくり返って見えるが、そこには偶然か、はたまた天の
使命か

そこには――

「・・・なにやってんの？」

――エルがいた

「・・・ハハハ・・・」

偶然とは、天の使命か？

09 黙れる者と話せる者（前書き）

とりあえずここらへんから力はいってます（遅

09 黙れる者と話せる者

09

「・・・ちきしょう」

ゼロはエルにばれてしまった事の後悔と、悔しさやらなんやらで泣いていた

ビービー泣いているわけではないのはあるが、そのゼロの泣きっぷりをしばらく見てると、エルも悲しくなって、結局取った行動は――

「泣かないでよ、ゼロお」

慰めだった

だが、どうにも泣きやんでくれない。もはや子供だ

「ひつく、ひつく・・・」

結局エルも泣き出してしまい、脱水症状になるのではないかとばかり泣いていた。

――数分後

エルとゼロはすっかり泣きやみ、本題に入っていた

「で、マオに作れとねえ・・・」

「そうなんだ。本当にすまない」

「――謝るの多いよ。こっちが気が引けちゃう」

「う、悪い」

「だから謝るなど――まあいいや。それより、本当にこの設計図は正確なんだろうね？」

「別に俺が作ったわけじゃないが、保障する」

「じゃあ悪いけど、もう一度腕を見せて。ひじ辺りから」

エルがそういうと、ゼロはひじ辺りからはずした

ゼロの腕は、手首、ひじ、肩の少し下が外れるようになっていてこれは修理しやすい為と、代用品が利くからの目的で作ったしかし、今回の場合、「代用品」とは「武器」のことであった

小型ほど手首に近く、大型ほど肩あたりである（剣などの例外を除く）

「ふーむ・・・」

エルはゼロが認めるほどの知識があつた

どういうことかというところ、ゼロも機械に対して詳しいことは詳しいのだが、エルとは分類が違つるので、どちらが詳しいのかよくわかつてない

大まかに言えば、エルは武器マニア。ゼロはエンジニアだつた

故に、こういう「未知」のものは、なぜかエルのほうが役に立つ「確かに正確だね。作ってみようか」

エルは立ち上がり、ドアに手をかける

「つ、作るのか？」

ゼロが驚いた様子で止める。

まさかこんな簡単に引き受けるとは思わなかつたからだ

「作るよ。使うかはわかんないけどね」

「・・・」

ゼロは戸惑つた。こんなに簡単に作らしていいのだろうか？

しかし、その戸惑いもエルが受け流す

「大丈夫。数分——いや、九個あるから十五分くらい待つてて」

「え？」

「じゃあね」

「・・・」

なぜか逃げるようにエルはドアから出て行つた

「・・・マジかよ」

今回のエルの行動力には、ゼロもあきれるほどだつた。

普通指揮を取るのにはゼロの方がだが、今回の場合、逆と見える

そう、普通なら考えられない事だ

「・・・」

しかし、じつとしているのも退屈になつたゼロは、時計を見た「まだ九分しか経つてない・・・」

エルは十五分くらいかかると言ったのだ。まだだろう

「・・・？」

ゼロは、何故か急にエルが気になった

「何してるんだらう？」

前回のこともあり、吹っ飛ばされる事を予想して、恐る恐る見てみると・・・

創ってない！？

話している・・・どうやら話し相手はクラスメートのメイのようだ
メイは女子には珍しくショートカットだが、顔は可愛い方だ。多
分男子の十人中三人は恋みたいなのを抱くだろう。

ファッションは冬にふさわしく、女の子にもふさわしそうな可愛い格好をしていた。普通の男子なら「可愛い」と言うだろうが、ゼロの目にはそう映らない。

メイは、寒さで顔を赤くして、エルと楽しそうに話していた
なんて仲良さ気・・・って待てよ

作ってないって事は・・・偶然出会ったのか？

ん？でもいくらキールが死んだといっても、普通こんなところ来る
わけないし、エルに付いて来たってことなら、つじつまが・・・

・・・ん？

なら、最初からいたって事で・・・

ん？え？あ？

話は全部聞かれてた・・・？

・・・

・・・

・・・

ゼロは、それを理解するのに、約三十秒かった

まるでフリーズしたパソコンのようだった。

で、フリーズしたからには解凍した訳で、

「なあああにいいいいいい！！！！？」

ドアを突き破りそんな勢いで出て、エル、そしてメイのところに
行った

そりゃ尋常じゃないスピードで。

距離があつた為、着いたときは、すごい息遣いで、メイに聞いた

「お、お前・・・聞いてたのか？」

「ぜ、ゼロ！どうしたの？」

すごい息遣いのゼロを見てエルは驚く

一方ではメイはきよんとしている

「ゼロ？どうしたんだよ」

「き、聞かれたのか？」

「え？何をさ？」

「だから・・・っ・・・」

マオのことだ！と言いたかったが、メイが目の前にいる

どうエルに伝えるか・・・

「マオのこと？」

エルが言ったのかと思った、しかし

言つたのは、メイだった

「は？」

「え？」

二人して、フリーズした

10 鳴らされた開戦のベル

10

「ぬー・・・」

「んー・・・」

「ふう〜」

都合が良いのか悪いのか、雪が降った。

さすがに寒いので、雪しのぎの代わりに、またキールの家を使っ
た。

でも、寒さはしのげない。不思議な家だ。

「ねえ、なんでそんな不思議な顔してんの？」

メイが聞く。確かに、ゼロとエルは考え込んでいた

だが、原因がメイと言う事は、彼女自身気付いてない

「ねえ、どうしたの？」

メイが、彼女の特徴である可愛い顔で聞いてくる

ゼロなら関心すら持たないが、エルが折れてしまった

「えーっとね・・・メイは何で知ってるの、マオのこと」

「バツ——お前！」

ゼロは止めようとしたが、既に遅いと言った感じがだ

だが、そんなゼロの感じも無視するように、メイは喋った

「え？何で知ってるかって？」

メイは、ゼロが迷ってるなどと言うのはお構い無しに、昨日の事
を話した

「それがこの前ね・・・」

メイは、昨日の事を話した

私はその日、取材だったの

取材と言っても、知っての通り、私の趣味で、職業じゃないよ
目的は、やっぱり現場検証！

何でかって言うと、その日の少し前に、私の家の近くで爆発が起ったの

爆発と言っても、火災じゃなくて、粉塵爆発のようだった。なんだなんだと、近くの人が現場を野次馬してる間に、私は直感で、違う方向に行った

そのすぐ近くの、キールの家ね

もちろん、その日はキールさんがいたんだけど・・・

キールは、ジャンクに埋まっていたの

近くで、ゼロが埋めているのが見える・・・まさか・・・

「・・・布団代わり？」

そう思ったが勘違いだと思った、何せ外だ。外で布団をかけるなど馬鹿だろうって

ゼロはその時、くしゃみをした

「大丈夫？」

メイが妙に心配した。何せこの寒さだ、風邪を引いたかもしれな
いと思ったのだ

「あ？・・・大丈夫だよ。続けてくれ」

しかし、ゼロは寒気も感じていた。

エルからの痛い視線に・・・

話を続けるよ

ゼロはキールをジャンクに埋めて、その後、何故か失神している
エル君を担いで帰った

これも私の直感で、追いかけてようと思った

でも、直感違いみたいね。その日は家に帰っただけだった

エル君は途中で起きてたみたいだけだね

・・・

「で？」

「で？つて何？」

「本題に入つてねえよ！何で知ってるか聞いてるんだよ！」
ゼロが勢い付いたツツコミをする。

「あ、ごめんね。でも前置きは必要でしょ？」

「む・・・わかった、続けてくれ」

爆発の原因がわかったの

警察の人はジャンクの着火だつて言つたけど、アレは嘘ね
アレは人間業じゃない。そう思ったの
で、思い当たつたのがあなた達。

そりやもう大当たりだつたわ。あなた達がキールさんのところで戦
つてるんだもの

「え・・・」

「な・・・」

「嘘じゃないわよ、声だつて聞こえたし、いつ流れ弾が当たるか冷
や冷やしてたもん。ね、マオ君」

「ま、マオ君つて、オイ。そんな簡単にこいつが出てくるわけ・・・」

「・・・悪い。やっぱりあの気配、人間だつたのか・・・」

エルが話すが——マオの声だつた

「・・・つてええ！？出た！」

「悪かつたな、出てしまつて。エルには変わつてくれといったんだ
が？」

「知るか！」

しばらくマオとゼロは口喧嘩していたが、その分メイは一人にさ
れたので、話に割り込んだ

「ねえー」

「なんだ？」

反応したのはマオだつた。それは、優しさか、はたまた神の下心

か・・・

「マオ君、あなたと話すのは初めてなんだけど、一つ聞きたいの」

「一体何だ？答えられる事なら答えるぞ」

「あなた達が戦ったあと、不思議な光を見たのよ」

「光？」

ゼロが聞いた、ゼロ自身も口喧嘩を諦めたようだ

「そう、光よ。なんて言うか、虹のように七色なんだけど、ふわふわしてて、なんか引き込まれそうな光——」

「・・・っ！」

「どうした？」

マオが反応した。微かに脅えるような顔を見せた

ゼロはそれを、不安と感じ取った

「どうした？マオ」

「あ、あいつだ・・・あいつらが・・・」

顔はますます引きつり、声も脅えていた

「ど、どうしたんだ！マオ！」

「あ・・・いつ・・・らが・・・」

「あいつら？あいつらって誰だ！？」

ゼロはマオの肩をゆすった、それでも変化は無い

「あいつらが・・・もうすぐ・・・来る」

「あいつらって・・・ええい！」

バゴツ！

ゼロは、エルの顔を二度目にして殴った

「うつ！」

加減は入ったが、それでもかなり痛い

「さっさと答えろ！あいつらって誰だ！」

ゼロは切れていた。ゼロ自身、うだうだ言ってるのは嫌いなのだ

「答えろ！マオ！」

「や・・・奴らがくるんだ・・・神が・・・」

「神だと？」

「俺にして俺じゃない。俺らにとって最強で最悪の敵・・・神だ」

「何だと？それがさっきの光の話と関係あるのか？」

「・・・ある。その光は奴らの人間から見た形だ。原型が無いからそう見える」

神の形は原型をとどめていない。つまりふわふわした形と言う事だ

「・・・光が・・・神？・・・つまり——」

「奴らが、神が、すでに地上に降りている・・・少ししたら狙われるんだ。俺は」

「狙われる？一体それはどういうことだ？」

ゼロには解らなかった。マオは何も悪い事をしていないのだから、マオには原因がわかっていた

「奴らは・・・仲間殺しをした奴を死刑とする。それは話したな？」

「ああ、確か戦闘のとき——ん、だったらゼオはどうなんだ？奴は天上に戻って再生——」

「してない。再生しようとした瞬間、消滅させられたはずだ」

「な・・・」

ゼロは絶句した。神あろう物が、そんなむごい事をするなど・・・しかし、ゼロはもう一度聞いた

「だが、お前は悪い事はしていないだろ？ゼオ自身、地上で言えば脱走者なわけだし、それを少し傷つけただけだろ？」

「違う、お前はわかってない・・・俺ら神にとって重罪なのは——」
ドゴオオン！

マオが言おうとした瞬間、家の近くにある、ジャンクの山が吹っ飛んだ

「な、なんだ!？」

ゼロは状況を確認するために、家を飛び出した

メイも取材本能が目覚めて、ゼロのあとを追いついた

一人となったマオはそのまま震えだし、こう呟いた

「・・・来た・・・」

11 神の表れ

11

ゼロは家を飛び出し、状況を確認しようとした

「な・・・」

ゼロは絶句した。さっきの音、一つのジャンク小山が吹っ飛んでるかと思いきや、全ての山が消えていた

「うわ・・・」

出てきたメイも、さすがに驚いたらしく、しばらくポカンと口を開けたままだった

しかし、上着の下からカメラを取り出し、周りの様子を撮りだしたしかも、キールの自宅だとわかりやすいように、目印となるようなものも撮っている

「・・・って待て！」

ふと気付いたようにメイが写真を撮るのを、ゼロがとめた

「なんで？」

「いいから待て・・・」

そう言うなり、いきなりゼロはメイの口を抑えた。そして自分の口に人差し指を立て、「しーっ」の態度をとった

メイは外そうとしたが、静かになってみると、変な音がしていた
ゴゴッ ゴゴゴゴゴ

まるで、何か巨大なものが動いているような音だが、途切れ途切れに聞こえる

しかし、正体を探ろうにも、どこにも見当たらない

ゴゴゴッ ゴゴゴゴゴゴゴ・・・

・・・

・・・

音が消えた・・・

遠くに行ったのか？しかしさっきは大きくなった

ゼロは考えた。まさか・・・

「逃げる！下だ！」

ゼロは瞬時にメイの口を抑えていた手を外し、その手をメイの腹に回し抱きかかえたあと、ステップで三分下がった

すると・・・

ゴゴゴオ！ ガゴオ

地中から大蛇のような首が出てきて、開いていた口に土が大量に入った

もしその場にいたら、間違いなく食われていただろう・・・

「な、なに！？」

メイはじたばたした。大蛇を目の前にし、ゼロに抱かれているのだから

「は、放して！」

「まだだ！食われたいのか！？」

「っ・・・」

大蛇は、目を細め、あたりを見回した

ゼロは考えた。目を細めるのならわざわざ地上に出る意味は無いおそらく、また地下にもぐる・・・さてよ、と言う事は目以外の感知する能力・・・

耳？

いや、しかしさっきの言葉は音として聞かれていない・・・ならば・・・

ゼロは近くの石を、勢いよく蹴った。遠くでかつんと音がした

「！」

すると、大蛇は音の方を向き、地上にもぐり、その石めがけて食らいかかった

石の位置は丸呑みされた

「やはりか・・・」

「えっ？一体何なの！？なんなのよー！」

「じたばたするな！感づかれる」

「・・・」

ゼロは確信した。どうやら奴は、土からの振動で感知しているらしい

歩くたびに場所がわかるというわけか・・・

「だが、声の振動だけは伝わらないようだ。仕方ないが、マオを呼ぶか・・・メイ、呼んでくれ」

「えっ？私？」

「俺だと、声出した時点でよろけそうなので・・・」

「は？——まあいいか。マオ君——」

ゼロは突っ込みたかった。こんな状況でも君付けかよ・・・だが、出てこなかった

「なっ、奴め・・・出てこないのか」

出てこないし加勢が来ないとすると、どうしたものか・・・

「くっ・・・」

ゼロは、その時一步下がってしまった

「しまっ——」

大蛇がゼロの方を向く。大蛇が確信したような動きを見せたその刹那、ものすごいスピードで大蛇が迫ってくる！

さっきので距離はつけたものの、速さが普通ではない喰われる！

「っ・・・」

喰われ・・・なかった

何かが、蛇の動きを止めたのだ

では何故——まさか！

「マオ！」

とゼロは思ったが、周りにはいなかった。

しかし、よく見ると、大蛇が止まっているのは確かだが、何かに手なづけられたように大人しくなっている

手なづけられている？まさか・・・

まさか・・・あの蛇は・・・使者か。

使者とは、使いの者であり、もちろん使いなのだから上がいる

上とはこの場合、神に値する可能性が高い・・・で、手なずけられていたのだから・・・

「神がいる!？」

「え?なに?」

遅かった。あの時、出なければ正解だったのだ

出なければ、神に会うことも無かったのだ・・・

12 仲間の敵

12

神に会うことも無かったのだ・・・

「まさか・・・神か・・・」

「な、なに？あの人たちは」

神は、原型があり、人の形をしていた

全部で五人いた

一人目は、仙人のような髭をしており、それでもって威厳らしきものがあつた

二人目は、体型こそ太めであるが、目の奥に宿る光を直視すると、吸い込まれそうな感覚に見舞われる目を持っている

三人目は、神とは思えない、非常に周りに警戒をしている神

四人目は女。片手に長めの槍を持っており、目は獣の眼である

五人目は、男なのは確かだが、他の四人と比べて原型がままならず、黒い霧のようだった。顔もフードのせいで見えない。

五人とも、黒いマントにを羽織っていたが、ゼロたちの存在を見るとマントを消した

脱いだのではなく、消したようだ。一瞬の出来事だったし、周りにマントが落ちていない

しかし、五人目だけは別で、黒い霧のままだった

「お、お前らは・・・神か・・・？」

ゼロが半分脅えるような言い方で言うと、一人目の仙人のような神が言った

「人間、我らは神だ。お前と呼ぶのは挑発に値する」

声の一つ一つが、びりびりとした音に聞こえる。

声自体は聞こえるが、その音は聞き終わると、何故かくらくらした当然ゼロもくらくらしたが、メイは耐えられず、その場に倒れた

「メイ！」

「人間、その女は無事だ。しかし我らの用件を聞いてもらおう」
「なにい？」

「我らはただ降りてきたのではない。一つは視察。そして一つが神の抹殺だ」

「神の抹殺？」

「そうだ、マオと言う奴がいるだろう。そいつを呼び出せ」
「・・・」

ゼロは知らないという手段も考えた

しかし、神自身、ここにマオがいる事を知っているのだから、俺とマオが知り合っているというのは知っているかもしれない。と思った

しかし、すんなりと渡すわけにはいかない。マオは、友なのだ
ゼロが決断した答えは、こうだった

「嫌だね」

「何？」

「嫌だつてんだよ。さっきから聞いてりや一方的な話ばっかしやがつてよ。それにお前の口調は何様だ。ああ神様か？それでも頼むときくらい命令は普通やんねえだろ。神も馬鹿だ。マオくらい馬鹿だ」
「何だと？貴様我らを・・・」

「その口調が気にいらねえつってんだろ！？直んねえのかクソ野郎！」

「な・・・」

ゼロは遂に切れ、神は絶句した

そもそもゼロは命令が嫌いなのだ。命令するものは神だろうが親だろうが友だろうが、一発殴る。ゼロの鉄則だ

「まず一発殴る。覚悟しろよ、神仙人さんよお」

そして、本当に神であろうと、行動に移す。それもゼロの鉄則である

「うおりゃああ！」

ゼロは仙人のような神に殴りかかる

右腕が捉えるのは、顔狙い

しかし、止められた

「ほう・・・人間は好戦的だ・・・だから私の仕事も助かる・・・」
ゼロの拳は止まっていた。神の一人の黒い影が一瞬動いたかと思うと、黒い影の黒い鞘がゼロの拳を止めたのだった

ゼロの勢いと、鞘の強靱な硬さゆえ、ゼロは右手をいためた
「痛ッ・・・てめえか」

「エンマに手を出してもらっては困るのですよ、ゼロさん。私はデスです、以後お見知りおきを・・・」

黒い影が、刀を持たない左手でフードを取ると、そこからは銀髪で細目の、優男らしきものが表れた

鞘を右手から左手に持ち替えると、一歩下がり、右手を頭のところから腹へ、そうしたお辞儀。どうやら貴族風のような

「何故俺の名を・・・聞くまでもねえか・・・神だもんな・・・」

手の痛みは相当激しいらしく、左手で右手を抑えており、話し方も途切れ途切れだった

「そう神です。・・・っとゼロさん、相当痛いようですが、骨でも折れ・・・」

「るっせえ！てめえと話す暇はねえんだ！そのエンマとか言う神と話させる！」

エンマはデスが間をふさぎ、見えない状況だった
すると、デスがゼロの状況を見て

「やれやれ。ゼロさん、エンマと話をするなら、まず私を通してくれませんか？死にますよ？」

「んだと？」

左手で右手を抑えたまま、ゼロがにらみつける

しかし、デスの表情は変わらない

「ええ、死にます。私は死神なんです。まだ未練があるでしょう、まず私と話をしましょう」

「るっせ・・・」

「あの女の子も殺しましょうか？」

「・・・っ！」

メイの事だった

デスは全て見通しているのだった

「神とは全知全能と言います。あなたが恋と言う感情を抱いている事くらい知っているのですよ」

「・・・わか・・・った・・・」

「私たちも要求しますが、先に聞きましょう」

「ああ・・・神達・・・いや、あんたたちはどうして・・・」

マオは、エルとともに震えていた

エルだつて神を全て知っているわけではない。しかし、マオが震えるほど神は強いのだ

神・・・その存在は絶対と言われる

絶対の存在が絶対の存在を恐れる・・・それがどれだけ恐ろしいか、それはマオだけが知る。

エルは、心の中でマオと話した。

ゼロを放っておけない、そして、どんな状況になろうと、彼は守ってくれた。

腕の件は驚いた。だが、それはとつくの昔に知っていた。それが真実だと知っただけだ。

そんな突っ走り、前しか見てなくて、それでも、皆を見ているゼロは、見捨てない。

「・・・でしょ？マオ・・・」

言葉は発していない。しかし、エルはマオが心を読み取ってくれていると信じた

——信じるだけだった。

「——以上です。ご質問は？」

ゼロは聞いた。さっきの事、神の存在、マオという全て・・・そう、全てを、聞いた

そして、聞いてしまった事の後悔、それは

「・・・絶対神・・・マオ・・・」

「ええ、そうです。では要求を飲んでいただけますか？」

「わか・・・った」

何かに取り憑かれてしまったかのように、ゼロは要求を飲んでしまった

否、取り付かれたのではない

すべてを知って、臆してしまったのだった

・・・マオを渡せば、すべて終わる

・・・こんな不幸などなくなるんだ

そんな考えだった

「では、遠慮なくマオはいただきます。・・・できればあなたから説得していただけますか？」

「・・・何？」

「僕たちが説得しても、多分拒否するでしょう。それに、無理矢理連れて行っても、自滅するでしょうし」

「そうか・・・ならわかった。だが・・・抵抗した場合は？」

「そうですね・・・少々力技も必要でしょう。私の剣を貸します」

そう言って、デスは懷から、1m程の剣を取り出した

しかし、その剣は意外に軽く、雲をつかんでいるような軽さだった

「では、頼みますよ。ああ、彼女は平気ですから。家に連れ戻しておきますよ」

「・・・そうしてくれ」

ゼロは、マオたちのいる、キールの家に足を向けた。

黒き剣を持って――

感じる・・・来た

「え？」

「ゼロの野郎が来た。武器を持つてな」

「え？それは、どういうこと？」

エルは一瞬マオの言う事が理解できなかった

理解と言うより、わざと聞き取らなかったと言う風に

「理解できないのも仕方ない。だが、ゼロは、俺らを説得する気だ。」

「説得・・・？なら武器は必要ないじゃん」

エルはますます理解できなくなつた

説得なのに武器？何でゼロが？

「確かに説得に武器は必要ない。だが、もし抵抗した場合は・・・」

「・・・！？」

なるほど、そういうことが

僕たちが見す見すマオを渡すわけがない

だから、抵抗したら・・・力づくで・・・

・・・ゼロ・・・

「エル、ゼロは操られてはいない。つまり・・・」

「ゼロの意味だね・・・わか・・・る・・・よ・・・」

エルは泣いた。

どうしてこんなことになつたのだろうか？

マオのせいかな？ううん、違う

ゼロはマオの事を知らない。僕だってゼロの事を知ってるわけじゃない

知つたかぶりが・・・引き起こしたんだろうなあ・・・この事件

僕たちの責任か・・・なら！

「行くよ！マオ」

「おう！心意気買った！」

エルは涙をぬぐい、マオに交代せずに、キールの家を出た

13 敵と敵

13

小屋の目の前に立つゼロと、そこから出て来たエル。

そして、先に口に出したのは、ゼロだった

「エル・・・マオを渡してくれ」

「嫌だね」

即答だった。すでにエルの気持ちは決まっているのだ

逆に、ゼロの気持ちは揺らいであり、即答された瞬間に口を閉じたエルは思った。今なら説得できるのは僕の方かもしれない

「じゃあ、ゼロは、なぜマオを渡すの？」

「・・・だ・・・」

「ん？」

「マオは・・・絶対神なんだ」

「へ？絶対神？」

絶対神。ゼロのことであろうか？

いや違う

「絶対神・・・神の中の神と言える神なのは知ってるな？」

「んー・・・こんがらがってるけど・・・そうだね」

「絶対神がいないのは、王政での王がいないようなもの。つまり滅ぶ・・・」

「滅ぶって・・・何が？」

「国・・・そして世界・・・この世界そのものが消える事になる」

エルは一瞬間こうとしてためらった

世界が滅ぶ？マオがいないだけで？

そんなの、おかしいよ・・・

「おかしいよな・・・マオがいねえだけで世界が滅ぶってよ・・・くつくつく・・・」

ゼロは答えが見つからない。マオを渡して世界を救うか、渡さず

に滅ぶのを待つか

「そんなの・・・おかしいよ！」

エルが大声で言った。ゼロもおかしい事は承知のはずだった
しかし――

「なら、お前を殺してでもマオをもらおう！」

「ッ！」

ゼロは左手に持っていた鞘から剣を抜き、エルに斬りかかった
エルはとっさに左側によけた。しかし、二回目が来る

「くそぉ！」

ゼロは必死だった。世界が滅ぶなど許さない！

振りは大振りだったが、剣が軽い。しとめるのも時間の問題だ
「っ・・・」

一方、エルは焦っていた

反しが早すぎる！マオに代われない。

エルたちは、交代するのに約五秒の時間がかかる。その間のスキ
は命取りだ

このままでは戦えない。ゼロが敵であり、マオと代われない
どうすればいい！？

「うおらぁ！」

ゼロが、エルに向かって勢いよく剣を振る。

ちょうど頭のとっぺんを掠めたが、ぶんっと言う大きな音が聞こ
えた

「どうしたエル！！このまま死ぬか」

「くそっ！やめてくれ、ゼロ！」

「なら降参しろ！そしてマオを渡せ！」

ゼロは剣を振りながら答えた

最後の一言が終わったあと、大きく上から振りがぶった

エルがしりもちを付いた。斬られる！
ぶぉん！

「——最後の猶予だ。マオを渡してもらおう」

ゼロはエルに矛先を向けた時点で、剣を止めた。

「い、いやだ・・・」

「なら、殺す」

ゼロも人が変わった。何のために友を殺すのか・・・

エルは悔しかった。ゼロに斬られるなど・・・

死ぬのか・・・

「最後だ！」

ぶんつと言う音がした

斬られ・・・ていなかった

「なっ・・・」

ゼロは驚いた。

「なぜだ・・・」

エルが・・・腕で剣を止めたのだ。

峰ではない、刃の方を・・・

「なぜ・・・そこまで・・・」

もはや死ぬのは恐くなかったはずだと、ゼロは思っていた

エルは右腕から血を出しながら話し出す

「確かにさ・・・死ぬのはもう恐くなかったよ・・・でもさ・・・死んで、マオが盗られるんだろ？」

なら・・・死ねないじゃん・・・ッ」

エルは右腕を痛がり出した。刃から手を離れた右腕からは、血がどばどばと溢れ出した

エルの右腕は、重傷だった。切断とまでは行かなかったが、骨の半分まで到達しており、血の量が半端じゃない

このままでは・・・血がなくなつて、死ぬ。

だが、エルは苦しみながらも続けた

「ゼロ・・・僕は後悔しないよ・・・だつて・・・」

エルは一瞬痛みが、そして、続けた

「僕たち・・・親友だもんね・・・ぐっ・・・」

「……………」

ゼロは、しばらく見ていた。

エルの話、しばらく聞いていた

そして、口がゆっくり開き、冷たい視線で、言葉を発した

「マオ、おめえ気付いてんだろ？もう自分が絶対神になれないって」

エルは失神した。そしてすぐに、マオが表れた

「フフフフ…解ってるじゃないか。ゼロ」

「何故だ！何故あんな事を…」

「…すべて聞いたのか…」

「ああ聞いたさ！なぜあんなこと…」

「黙れ！」

「…ツ…」

ゼロは言葉を飲み込む。マオが語りだす

「たしかにやったさ。だが、それは仕方の無いことさ。悪い事ではないだろ？ゼロ」

マオが笑顔で…いや、苦痛に耐えているエルの顔で、笑顔を作った。

そして、失神した……

「……………」

ゼロは気付いた…そうか、そういうことかよ

「…やってやるうじゃねえの…」

ゼロは、失神したエルのほうを再度向いた。

少しためらったあと、エルを担ぎ、そして、デスたちのほうへと向かった

「約束だぜ」

エルを担いだまま、ゼロはデスたちに言った

「ああ、ありがとうございます。これで僕たちも助かります」

「ああ、そうだな…これが答えだ！」

ゼロはあろうことがエルを投げ出し、デスに向かって剣を振るった
「むっ」

デスは避けたが、次の二回目が左足に当たった
斬れた

「あうあ！」

デスは黒いマントをはためかせながら、後ろに倒れこんだ
しかし、神なのに再生しないとはどういうことだ？

「人間！なぜその剣を持っている！」

エンマが怒鳴った。

ははあん、なるほど。この剣なら何でも斬れる・・・少なからず神
の野郎は再生しねえわけか

「むっ・・・」

どうやらエンマたちも心を読んでためか、見事に顔に出してやが
る。凶星と言う言葉を知らないようだ

「凶星なんだな？神さんよお？」

「そ、そうではない。その剣は呪われて・・・ぐあ！」

「嘘も大概にしとけよお？」

「ぎう・・・」

ゼロはエンマの腹に剣を突き刺したのだ

エンマは剣を抜こうと手を伸ばしたが、下手すると自分の手が斬
れる事に気付くと、手を引いた

その様子を見たゼロは、こう言った

「引け！神たち！俺ら人間は崇める事も出来るが、見下す事だつて
可能だ！わかるか！

まず要求を飲め！絶対神、シンオウをマオ無しで復活させる！期
限は一ヶ月！わかったか」

「なにをふざけたことを・・・」

デブ・・・二番目の神が声を出した

手には既に槍のようなものを持っており、どうやら攻撃してくる
ようだ

「やめなさい。ヨラク」

三人目の神が二番目の神、ヨラクのそれを制した

「なにをする、カシン」

三人目の神、カシンは手でヨラクを制しながら、こう言った
「たしかにあなたの言う通りかもしれませんが、ゼロさん。人間には情と言う物があるでしょうし・・・」

「わかってねえな。人間の情とかじゃねえ。自分達だけで、なんでやろうとしないんだ？」

「なんで復活させようとしない」

「それは・・・それぞれの種族と言うものです」

「ハア？だったらシンオウを「物」で作るひつようねえだろ？てめえら何でも作れるんだらう？」

「あ・・・」

そう言つて皆、エンマの方を向いた

もはや深々と刺さつてる剣は気にしていない様子

「そう言えばエンマは地の創造者だっけ・・・」

カシンが言つた

「ほらな、テメエらは馬鹿か？」

ゼロは深々と突き刺した剣を、エンマの腹から抜き出した

エンマは短い悲鳴をあげたが、それだけだった

しかし、腹を抱え、苦しみに溢れるその顔。もし人間なら死んで
いるだろう程の痛みだ

だが、ゼロはほぼ関係など無いように、語り始める

「エンマ仙人さんよお、出来るんだろ？」

「くっ・・・確かに私は・・・できない事もない・・・」

神の皆が驚いた顔でエンマを見た。左足を切られたデスですら、
驚いて声も出ない

「じゃあ・・・なぜ隠していたんですか・・・？」

カシンが驚きの表情で聞く。そこに信頼の目は無い
いや、カシンだけではない。神の皆が、驚いている——一人を
除いて

「だが、私は死ぬ。神ではなくなるのだ・・・」

「なぜ？」

「それは・・・ぐあつ！」

その瞬間、エンマの言葉に驚きをせず、いまだにフードを被っていた、二人目の神・・・クロクアがフードを脱いだ。

エンマの胸に、剣を刺して

「これが・・・理由・・・」

エンマの胸に剣を刺したクロクアが、エンマの続きの言葉を呟く。つまり、エンマはクロクアに殺されるのを恐れたのだった

「ぐっ・・・はっ・・・」

神の武器は、すべてを傷付ける事が出来る

それは、統治の為。そして、刑執行のため・・・

仲間を殺すのに、再生しては意味が無い。そのため、神の武器で神の心臓部分を刺すと――

死ぬ。

一つの短剣が、カランと音を立てた

紛れも無く、それはエンマの心臓を刺した剣・・・

そして・・・エンマの身体は、消えた

「な、なぜ・・・」

カシンだけがうるたえる。デスとヨラクは、じっとクロクアを見ていた。

それに答えるかのように、クロクアもデスたちを睨みつけていた
「何のつもりだ」

デスが低い声で、クロクアに問う。デスはうるたえの顔の様なものは、持っていない

それは、すでに知り尽くしていたかのように・・・

「ええ、つもりも何も、見ての通りですわ。エンマを殺しました」

「やはり、気に入らなかったのか、貴様は」

デスは威厳を込めた声で言う。

デスは知っていた、いずれ誰かがエンマを殺すだろうと

その事を知っていながら止めなかったのは何故か。それは、

デスもエンマを殺そうとしていたからだ

エンマは横暴だった。自らの統治のために、多くの神を殺した
自らが真の神だと。自らが治める者だと。

それはある種の狂信者だった

「殺して当然……か……」

ヨラクが呟く。デスも、ヨラクの言葉に賛成するかのように、小
さく首を縦に振り、そのまま俯いた

「では、やりましょう」

クロクアが、俯いたデスに向かって言う。デスはこくりと肯いた
そして……

14 そして・・・

14

「っ・・・」

神の武器が、ゼロの腹を貫く

「な・・・何が」

一瞬のうちの出来事に、ゼロは今の状況を把握した
クロクアはエンマを殺した。それは確かだ

だが、ヨラク、デスは、いくら肯いたとはいえ、なぜか俯いている・・・

しかも今刺している野郎は・・・デスカ・・・

「フッ・・・いわゆる操られているというやつらしいな・・・デス・・・」

ゼロは口を開く。声を出すのが精一杯なはずなのに、痛みなど感じさせず、腹に剣が刺さっているなど感じさせない様な、余裕

「貴様、死んでいないな」

デスが、さっきよりも低い声で言う。操られているのは本当のようだ

「つたりめえよ。こんなんで死んじゃあ、マオに申し訳が立たねえだろ？」

「戯事を・・・」

デスがさらにゼロの腹に深く剣を突き刺す。ゼロは、その剣にゆっくりと手をかけた

「危ういなあ。こんなもんはしまえよ。デス」

ゼロがその剣を握る。左手からは、血が流れ出てくる

そして、勢いよく、抜く

ズボツッと生々しい音がして、ゼロは剣を抜く

「・・・だからしまえよっ、こんなものは！」

機械化した右手で、剣を持ち直す。そして、その剣をデスに向ける

しかし、デスは全く動じない。操られているせいでもあるが、目の奥には、それ以外のものが感じられた

——殺してくれ——

そんな目が、デスの言葉を語っていた

「ほう……」

ゼロもそれを察してか、剣を地に向ける。腹の刺された跡からは、血がどくどくと流れ出る

ゼロも、気付いた。俺がこの場を制するんだ。俺が主役なんだ（違

「……」

「……やつぱ死にたいか？」

ゼロはその言葉を発した。デスは反応しない

「やれ」

唐突にクロクアが言い放つ。従ってか、デスは拳を握り、ゼロに向かつて殴りかかる

ゼロは

「死にたいか？」

その言葉を言い放った、そして

デスの右手を、斬った

「——」

デスが奇声をあげる。だが、それはデス自身があげる声ではないあくまで演出、人間に斬る事への躊躇。その作戦がクロクアの考えだった

そして、クロクアの予想通り、ゼロはためらってしまった

……そう、それまではクロクアの予想通りなのだ

「——るっせえな」

そして、ゼロは容赦なくデスの手足を切断した

「なっ！」

デスは手足を失い、その場に倒れる。しかし人間と違い、死んではいない。

デスは気絶し、クロクアは操り人形を失う

「さア、覚悟！」

全部が解っていたゼロは、クロクアに斬りかかる

「甘いのは貴様だ！私の操り人形はまだいるのだ！」

クロクアが両手を前に出す。するとカシン、そしてヨラクが目の前をふさぐ

「アホどもオ！」

またも躊躇無く、ゼロは神たちの手足を切断する

余りのすばやさで手加減の無さに驚いたクロクアは

「何故そこまで躊躇わない、人間」

「神さんよ、信じる、って言葉を知っているか？」

「・・・我らにその概念は無い」

「教えてやろう、信じる、ってーのは昔からのきれいごとの一つだ。仲間を心のそこから信頼する。その事だ」

「それだけか？」

「ああ、それだけだ。文句無いだろ？きれいごとはすっぱりと決めたいものだからな」

ゼロがせせら笑う。胸からの血は、留まり無くあふれ出る

「なめるなあ！人間」

クロクアの手刀が、ゼロの胸を狙う。ゼロはそれを交わす、が――とすっ

「・・・ここでよけられると・・・カッコイイんだけどな・・・」

クロクアの左手は間一髪でよけた、が、左手に隠し持っていた小刀が、ゼロの胸に刺さった。

そこは、心臓部分。

「・・・さすがの俺でも・・・無理か・・・」

ゼロは、その場に倒れた

15 最後の話

15

「つてなわけでGAME OVERでどうよ？」

「マジでー？死んじゃうわけ？」

「そーゆーこと・・・なわけねーだろ！生きてるっちゅーねん！」

休み時間の教室に、げらげらと笑い声上がる。主流はゼロとメイだ

・・・神との戦いは、終わっていた・・・

「なーんか、夢のようだったねえ・・・」

「だが、俺は現にいるぞ？」

「だねえ・・・」

同時刻、五月の風がそよぐ屋上で、二人の人影がある

それは、エルと、マオだった

マオの身体は、あることをきっかけに具現化。

今は偽名、シム・アヴィンを名乗って、学校生活を送っていたりする
もちろん、能力はそのままだ。しかし、日常生活では滅多に使わない

そりゃあ、正体がばれたら危険だからだ

「・・・だねえ」

間抜けなエルの声が、青空にエコーする

神との戦いは終わった

それは、絶対神シンオウが、考えられもしない阿呆な形で登場したからだ

「――」

マオの最後の力で、シンオウの復活。その場のジャンクパーツでの合成だった為、身体が機械化されてるのは仕方が無い

それよりも・・・

「やあ」

という挨拶

「元気にしていたかい？」

というありきたりな言葉

「何をしていたんだい？」

神、または機械でない限り、殴りかかりたいくらいの間抜け感

そんな神が・・・

絶・対・神である

「まさか・・・シンオウ様・・・？」

態度だけで気付いたのか、クロクアは機械だけの、いわばロボットに対して忠誠の立膝をし、頭を垂れた

だが、シンオウは、クロクアをちらりとも見ず、周囲の様子を見た手足を失った神たち。死んでいる人間、しかもその人間には、ク

ロクアの刀が刺さっている

「またやったのかい？クロクア」

「あ、え・・・その・・・」

「まあいい、因果湾曲をする。すべてを元に戻すよ」

「え？・・・因果・・・湾曲ですか？」

因果湾曲

すべての出来事（因果）を左右（湾曲）する能力。完全であると、命まで左右する

絶対神と、魔王しか使えない。すべてを左右するような力

「人間も殺し、神も傷つけたのだ。すべてを元に戻す」

「・・・わかりました」

因果湾曲は、すべてを白紙に戻すような能力さえある

故に、使った絶対神以外、全てを元に——そう、記憶すらも消えるのだ

マオですら、それ（絶対神復活）を忘れたのだ

だが、後に絶対神から全てを知らされ、マオはゼオ殺しの罪により神の座から外された

そして・・・マオは人間の座となり、「人間」となった

「・・・だねえ」

間抜けなエルの声が、青空にエコーする

「なにが『・・・だねえ』だ。お前学力は平気なのか？」

「学力？なにそれ？」

「・・・」

マオは、あきれと馬鹿らしさが混じった息を、青空に溶かした

はあ・・・

15 最後の話（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？出来れば感想をお願いします。

しかし、この「マオ」

実は「不明な点が多い」と言う難点を指摘され、どうしようかと思
ったところ、

いつそ続きを書いちゃおうかと言う考えが（汗

難点指摘してくれば、それなりに僕の作品は（僕自身も）磨かれ
ると思いますので、
評価をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1439b/>

マオ ～許されない神～

2010年10月8日15時54分発行